

二〇〇六年度 協会新委員揃う

二〇〇六年度、70回展の開催をめざし、以下の体制で臨むことになりました。全会員各位のご協力とご理解をお願いいたします。

記

◆委員長 澄川喜一

◆副委員長 山内秀臣

◆代表委員会（委員）

《絵画》鶴見雅夫／樺山祐和／小島隆三

《彫刻》上野良隆／小川幸造／須藤博志

《SD》白川隆一／野口育郎

◆合同委員会（委員）

◎会計委員会

《絵画》矢澤健太郎／小林昭子

《彫刻》大田雅代／菱田 波

《SD》雨山智子／加藤 徹

◎図録記録委員会

《絵画》林 純夫／木嶋正吾

《彫刻》久保制一／鞍掛純一／古川武彦

《SD》杉田文哉

◎IT委員会

《絵画》屋嘉部正人／阿曾沼明

《彫刻》鳥原正敏

《SD》岡本泰子／谷 浩一

◎広報委員会

《絵画》佐々木宗實／山口 都

《彫刻》中垣克久／奥田真澄

《SD》金子武志

◎会報委員会

《絵画》佐々木宗實／山口 都

《彫刻》藤森民雄

《SD》中野 威

◎印刷委員会

《絵画》押田陽子／千葉文隆

《彫刻》古川武彦／酒井 良／田中 実

《SD》下山 肇

◆特別委員会（委員）

◎国立新美術館準備委員会

《絵画》樺山祐和／小島隆三／屋嘉部正人

《彫刻》小川幸造／上野良隆／北郷 悟

《SD》佐伯和子／谷 浩二

◎70回展記念委員会

《絵画》高津鐵朗／鍋島正一

《彫刻》中垣克久／瀧 徹

《SD》日高單也／二井 進

◎受賞者展委員会

《絵画》間中敏子／杉野和子

《彫刻》岩間 弘

《SD》下山 肇／岡本泰子

◎懇親会委員会

《絵画》亀本信子／金本啓子

《彫刻》石川 浩／宇多花織

《SD》尾楚行男／片岡葉子

◆会計監査

《絵画》武藤岩雄《彫刻》渡辺隆根

《SD》日高單也

《事務所員》矢野淑子（月・水・金）

70回展を迎えて



委員長
澄川喜一

1936年、時代の激流の中にあっても純粹で自由な表現を第一にと、猪熊弦一郎・脇田和氏ら9名の画家が集い新制作派協会が創立された。佐藤忠良氏ら7名の彫刻家に加わり、時を経つつ日本画（創画会）と合流、また建築部が発足するなど、現代日本美術の貴重な歴史を刻みながら今年70回展を迎えた。現在、絵画部会員116名、彫刻部89名、SD部33名の集団である。

エジプトの伝説の霊鳥不死鳥(Phoenix)は、500年生きると果に火をかけ焼けて死に再び生れ変わる、不死永生の鳥という。常に新鮮であれという教えだろう。公募団体である新制作の使命は常に純粹で新鮮な創造の場であってほならない。各自それぞれ異なる個性を突きつけ合い、認め合い、切磋琢磨する絆がなければ鮮度は保てず品格もなくなるだろう。

常に真摯で純粹な仕事を発表し続け、多くの皆さんに見ていただけるよう門戸を大きく開こう。マンネリのぬるま湯に浸かると魅力は薄れ団体展の存在理由はなくなる。都美術館で70年お世話になった。71回展は新美術館で迎える。ホップ・ステップ・ジャンプと心機一転しよう。

2007年第71回展より新制作展は東京都美術館から六本木の国立新美術館に移ります。

来年2007年度から国立新美術館（六本木）が開館されます。都美術館の老朽化による改修の問題等あるなかで、新制作展は多くの主要公募展と共に来年度から会場を国立新美術館に移すことになりました。国立新美術館は国内最大の展示スペースを持ち、おもに公募展や企画展等に会場を提供するものです。

新制作展の展示スペースは、現在の都美術館、約3,650㎡から6,630㎡（うち野外展示場630㎡）と広がります。スペースを生かした新たな展開をしていきたいと考えます。

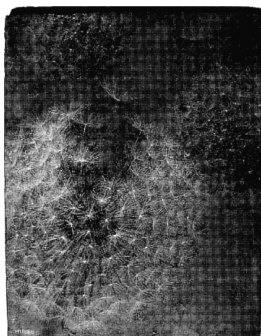
受賞作家展

会期：2006年1月16日(月)
～26日(木)
会場：ごらくギャラリー

絵
画

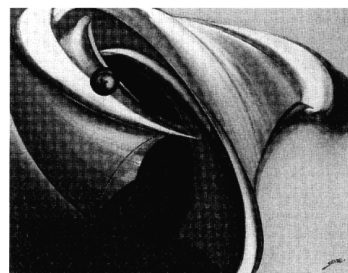


▲秋葉直樹
plants-57
37.0×41.0cm

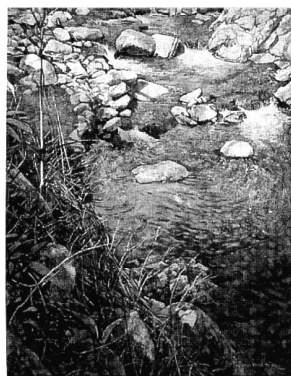


▲一居弘美
Seeds
41.0×31.8cm

▶曾根三千代
風の香
31.8×41.0cm



◀菅沼光児
FLOW
41.0×31.8cm



▲勝あらた
arata D
41.0×27.3cm



◀小浪春枝
散歩
31.8×41.0cm

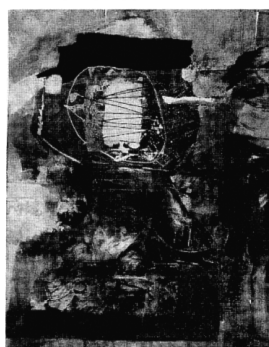


▼竹内 一
Rosario I
41.0×30.0cm

▼中村修二
マティスからの伝言
34.0×28.5cm

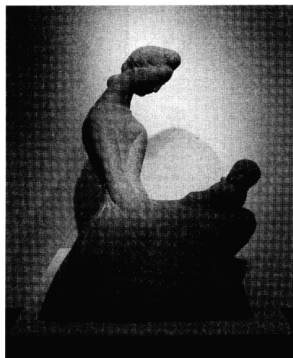


▼松本正代
遊
41.0×31.8cm

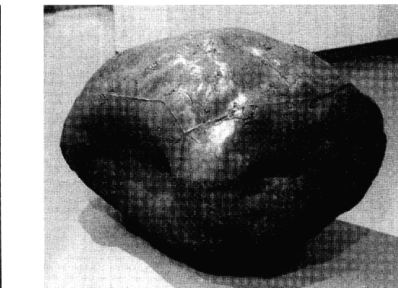
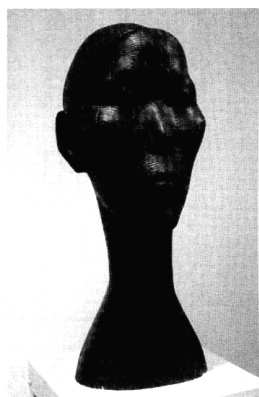


▼松本義三
こども
33.0×24.0cm





▼福本紀孝
ワコ (木)
25×30×66cm



◀小川 誠
癒しのかたち—春眠—
(テラコッタ)
84×107×109cm

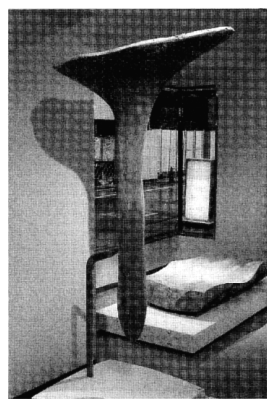
▼菅原英雄
柱礎 (鉄・石)
100×100×180cm



▼大野晴夫
昌 (石)
37×35×120cm



▼木方立樹
ソラミル
(木・木粉・その他)
90×90×200cm

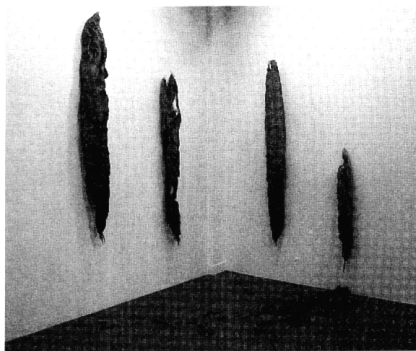


会期：2006年2月20日(月)
～3月4日(土)
会場：ギャラリーせいほう

彫
刻

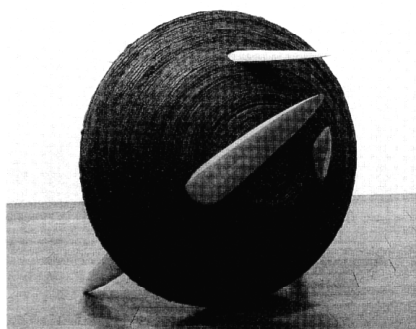
スペース
デザイン

会期：2006年2月19日(日)
～2月25日(土)
会場：画廊るたん



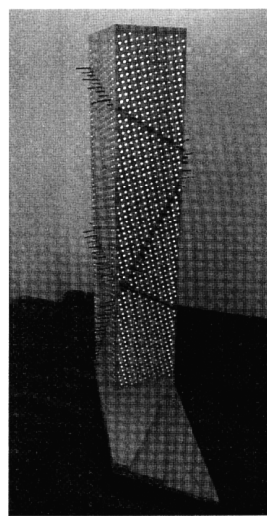
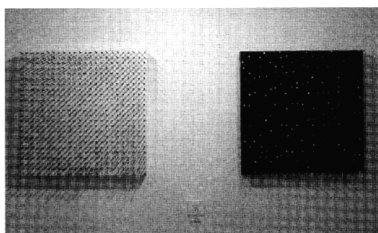
◀野倉勝治
Sign of thoughts II
(ジュート麻・その他)
150×30×180cm

▶岡 あや子
同じ様なもの?!
30×75cm



◀山本景子
無題 (紙)
90×110×90cm

▼岡 あや子
黒・白 (木・その他)
30×30×90cm



追悼

絵画部創立会員

脇田和氏

脇田先生の思い出

荻 太郎

脇田先生の御逝去の報せは、永年の御教示、御交誼を頂いていたので、悲しみと思い出が交錯した。

新制作派協会が、上野公園美術協会で若き九名の作家で旗揚げし、「純粋なる精神、云々」なる言葉に、当時私は学生時代だったが、強く感動した。七十年近い前のことである。

先生は「ジャズバンド」「ダンス」「二人」の大きな作品で、若い私達には新鮮であった。個性の強い九名の作家の心意気に打たれ、学校でモヤモヤしていた心の中が何か吹っ飛んで、やるぞという気が湧き起こり、それから冒険を試みる転機となり、今も大切にしている。猪熊先生を師としたのもその時で、自己確立の



中央において脇田先生、左より伊勢氏、白いウェアが、サングラス、筆者、石川氏。1961年頃。

目標を心に念じ、自分は何故絵を描くのかと考えたのもその時だと思っている。両先生は私に道を開いて下さった恩人である。脇田先生はいつまでもお若く、それはスポーツにも堪能な方だったからであらう。いや、仕事に打ち込んでいたのが正解かもしれないが、おしゃれで驚きの若さであった。昭和三十六年ごろ、ある会社のカレンダーを描いた頃、脇田和、伊勢正義、石川滋彦各先生と、富岡惣一郎に私と、五人で志賀高原のホテルで泊まり、スキーの会を開いたことがあった。その中で私一人が初体験。私の郷土は温暖なあまり雪も降らない土地で、内心どうしようかと思ったが、決心してお供することにした。他の先生方は皆様ベテランばかり、その翌朝、さあ出掛けようと言われたが、私には何も教えてくれません。非情を胸に、スキーを持ち靴を借り、先輩の姿を横目でちらりと見て、ズボンの下を靴下で覆い、自分もマネしてまあまあのお出立ち。一人ぼっちというのは淋しいもの、先輩は格好良い毛糸のスキー帽、私だけ当時流行していたベレー帽、スキー場ではかえって田舎くさい出発から引け目を感じたが、四人の最後に出発、何も注意がない私の心はかなり動揺していた。

目標は「リフト」。前を歩いて登る先輩は後方を注意することなく速い。無知な自分は哀れ、黙々と柵を頼りに沿って登る。「荻君、リフトの腰掛に乗ったらスキーを上げる」初めてのお教え、登るのだから納得。着陸は思いがけなく満点。その時、黒い雲が垂れ、吹雪が強くなり始めた。私は驚いて「ひとり先に帰ります」と言うと、伊勢先生が「すぐ止むから」と一喝。続いて脇田先生はにつこり笑う。そして高度恐怖症の私はこの時点でアウト。然し、私も満更でもない。なだらかな坂ならスイスイと走る。先生方はあれよあれよと消えていく。恐るべき急坂が突然現れる。「荻君はスポーツをしているから」おだてに乗るのは男の恥、この言葉を思い出し、ここは我慢のしどころ。決断したが最後の地点で転倒、残念でした。ベレー帽は飛んだものの、私は「ケ（毛）ガは、ありません」四人の拍手が聞こえ、先輩に感謝的一幕。何も教ええない、芸術家は自己で考えよとお教えか。その夜の食事は賑やかだった。脇田先生曰く「月光荘のおやじさん（洋画材料店主人）」は、お尻にスキーを敷き、両手で雪をかきわけて上から降りてきたよ。荻君の方が、まだ良かったよ。その時の脇田先生の優しい笑顔が美しかったことは忘れられません。

また脇田先生は、こよなく軽井沢を愛し続けられた。立派な美術館、軽井沢ならではの御住居。爽かな自然の中での自然との対話、厳しく心優しい純粋な精神、詩情、音、静謐、人間愛が画面の奥深くあるのだと私は思っている。

ルネッサンス時代、職人ブラス精神、それと数学が出来るのを芸術家と呼んだそうである。猪熊先生が「和ちゃんは数字に強い」と言われたことを私は覚えていた。脇田先生は立派な芸術家である。

もう一つ、脇田先生の思い出を書かねばならない。それは旧軽井沢ゴルフ場で、初めてゴルフの手ほどきをして頂いた。たまたま軽井沢でお会いして、ゴルフ場に行くからと、御一緒させて頂きプレイされるのを拝見した。その時は「荻君は野球をしていたからすぐ出来るよ」と、スキーの時とは全然違つて懇切丁寧に教えて頂いた。お邪魔になるのを覚悟して歩いた。先生は若々しく楽しんでいらした。よく飛ぶ、これは技術であろう。その後、新制作で風間完、相原求一郎、角浩、赤穴宏さん等で楽しんだ。

プレイを拝見しながら、制作される時を思い浮かべた。慌てず騒がず、静かに楽しむ。パット等は慎重なもの、ゴルフでも色々考えさせられた。

思えば私達は、絵画部創立者の最後の柱を失った。新制作は先人の言葉、特に「純粋なる精神」は忘れてはいけない。団体展の欠点は惰性になることである。三部手を繋ぎつつ、いつの時代にも生命力を持ち続け、新鮮で生き生きとし、お互いが責任を持ち、許す愛を持ちたい。

新制作展の入選のためでなく、自由で冒險もし、自己確立を望みたい。そして、何故我々は絵を描くのかを考えてみたい。脇田先生の思い出の終りに、こんな言葉を書かせて頂きました。



▲ダンス



▲ジャズバンド

「37年発行『新制作派』第二号より」 十一月小感

脇田 和

僕は一年を通じて、十一月の感觸を、一番好みます。自然を最も美しく感じるのも、今日この頃のやうであります。一年間の仕事も略へて、重荷を下した時の様に、一息深い呼吸をします、氣候は良し暢然と暮して夏からの制作の疲れもこの時分に忘れてしまひます。

今年は制作期が遅くなつたため、殆どこの間をアトリエに暮して了つたので、十一月の氣節をいつものやうに感じないうちに、冬になつて了ひました。このまゝ惶しく暮になり直ぐ新しい年を迎へるのは、少し詰らないやうな氣がします。毎年いま頃は、伸々遊び、緩り勉強もします、テニスも野球もゴルフもスケートも映画も遊ぶことは、幾らでもあります。特に此頃の短い午後の日差しの中に草木の色を眺めることは殊の外好きで、僕は一年のうち、風景はいま頃一番よく描けるやうな氣がします。

池上本門寺に近く住んでゐるので、十月中は、御會式の太鼓の音を聴く時分には、よく帝展入選發表のことを思ひ出しましたが、今ではその太鼓の音は長閑なものに響くようになりました。たゞこの時分から、十二月の初に懸けて本當に繪描きらしい悦びを覺えるの

▼ほぐれ花



です。自分の繪を靜かに、見直して激しい制作上の意欲を感じるのです。

昨年第一回展は、會の結成から、展覽會まで餘りに、短期間であつたため、仕事らしい仕事は、出来なかつたのでしたが、今年は春から夏秋冬に懸けての、長い制作期間を得まして、随分緩り勉強出来たと思つてゐます。繪をみて、一向そんな様子もないと、みられるかもしれないですが、途中幾度も構想が變つて、その度に、ドシドシ、構圖を變へていつたので、色んな、いま迄、自分の知らなかつた事を、會得出来たやうな氣がします。

最初は戰時氣分で凄じい繪を描く積りで、色々考へてみたのですが自分には全々持ち合せない性質のものであることに氣が着き、結局は題の様に和かなものに變つてしまひました。

途中支那事變の勃發で直接間接に影響もありますが努めてこれに打勝つ原動力を與へて呉れたやうに思へ確にいつもと違つた緊張を覺えます。併し本當の繪を

描くためのはりつめた氣心であります。未曾有の非常時で繪描きにとつては全くこの上もない苦難に直面してゐるのでありますがこれもよき試練なのかもしれません。

この時に「繪描きは何をしてゐるか」との聲をきゝますが吾々の態度は平生と少しも變りないことが眞の繪描きであることで今後どんな時世が來やうともたゞ良い繪を描くことの外何事もないことを強く感じてをります。

70回記念展の企画と内容

本年の新制作展は、70回記念展となり、東京都美術館で開催する最後の展覽會ともなります。来年は六本木の新国立美術館へ新たな出発というこで、通常の展覽會行事に加え、70回記念行事を行います。

- ①展覽會テーマ「表現！ Form・Color・Design」を設定
- ②記念図録 新制作歴史年表、特別座談会の内容等掲載
- ③記念展示 三部創立会員作品特別展示
- ④記念式典 9月18日、上野精養軒にて600名規模のオープニングパーティを予定。
- ⑤記念賞 新制作常設賞の他に、三部それぞれ第70回記念特別賞を設定。

* 展覧会情報 *

◇本年度、70回展は9月18日(月) (敬老の日の祝日で開館) を初日として開催されます。19日(火)は休館となります。

◇今回は各部ごとに第70回記念特別賞を設けます。また、従来の新作家賞受賞者には彫刻部会員澄川喜一氏の作品が授与されます。授賞式は9月18日(月) 3時より都美術館講堂にて開催します。

◇恒例の懇親会は、70回記念展祝賀会として展覧会初日の9月18日(月)、三部合同で行います。詳細は搬入時、または通知の際にお知らせします。

第70回展

ギャラリートリック

9/23 (土)

2:00 ~ 4:00

各部会場で開催。会員、出品者、入場者の方々の意見交換の場です。ふるってご参加下さい。

◇70回展の全出品作品をカラー図版で掲載した記念図録を発行します。

◇70回展図録(出品目録付)

編集発行 新制作協会
価 格 二五〇〇円

入選者には図録負担金をお願いします。

◇70回展入場料
一般券八〇〇円 / 学生券(中・高・大)四〇〇円 / 前売券四〇〇円

◇前売券ご入用の方は事務所までご連絡下さい。

70回展応募規定 抜粋

◇会 期 2006年9月18日(月)より10月3日(火)まで。午前9時〜午後5時(入場は4時30分まで)。

◇会 場 上野公園・東京都美術館

◇搬入受付 9月3日(日)4時(月)

◇搬 出 9月13日(水)14日(木)
※選外作品 9月13日(水)14日(木)
※入選作品 10月4日(水)5日(木)

※搬入受付・搬出時間はともに午前9時〜午後4時30分まで

◇陳 列 9月17日(日) 午前9時15分〜午後4時30分

◇応募料 応募作品一点 一〇,〇〇〇円
以後一点増すごとに、絵画部は五、〇〇〇円、彫刻部、スペースデザイン部は三、〇〇〇円を加算する。

※応募料は8月28日(月)までに協会指定の用紙にて郵便振込とする。

なお、やむを得ない場合に限り、搬入日に現金にて受け付ける。

※一度振り込まれた応募料は返金されませんのでご了承下さい。

◇【絵画部】

一、作品の大きさは、タテ又は高さ二七×ヨコ又は幅二七×奥行き又は厚さ三〇センチ以内。

一、額縁の幅は五センチ以内とする。

一、応募点数は制限しない。

◇【彫刻部】

一、作品の大きさは、タテ又は高さ二八×ヨコ又は幅二〇×奥行き又は厚さ二〇センチ以内。

一、作品一点の重量は一平方メートルにつき一トンを超えないこと。組み

立て式作品は一個の重量を一・五トン以内とし総重量三トンを超えないこと。

一、作品が規定を超過した場合、及び危険を伴うと判断された場合は搬入を受け付けない。

一、応募点数は五点まで。

◇【スペースデザイン部】

一、空間に関するあらゆるデザイン作品、実物、実験的作品、写真、模型等。表現形式は自由であるが、図面や写真は展示のためパネル仕立てとする。

一、二個以上の部分で構成する作品は図面又は写真を添える。

一、スペースデザインという性格上、組作品の展示に際して、作者との話し合いの上で構成等を一部変更する場合がある。

一、床面展示作品は、会場のスペースに限りがあるので、大きさ及び重量を考慮すること。

一、展示上危険を伴わない作品であること。設置、移動に耐えうること。

一、共同制作の場合は、全員について応募目録に必要事項を記入の上、連絡先一名を明示する。

一、応募点数は制限しない。

◇【作品の取扱い】応募作品が他の作品を破損するおそれがある場合は、搬入を受け付けないことがある。

◆付加事項

* 駐車場の有料化と免除について
一、搬出・入する場合は、搬入は作品受付時刻より二時間以内。搬出・撤去は四時間以内。

◇巡回展開催日程

* 新制作京都展

会期 06年10月20日(金)〜10月29日(日)

23日(月)休館

会場 京都市美術館

* 第70回新制作絵画展

会期 06年11月8日(水)〜11月12日(日)

休館日なし

会場 愛知芸術文化センター8F

愛知県美術館ギャラリー

* 第70回新制作絵画広島展

会期 06年11月28日(火)〜12月3日(日)

休館日なし

会場 広島県立美術館・県民ギャラリー

◇新制作協会eメールアドレス

新制作協会の事務所でeメールが受けられます。ご利用下さい。

ts-sesak@violin.ocn.ne.jp

計 報

▼清水一直氏(彫刻部会員)

二〇〇六年二月十八日、逝去されました。享年五十一歳。

▼大住閑子氏(絵画部会員)

二〇〇六年三月九日、逝去されました。享年九十歳。

心よりご冥福をお祈りいたします。

会報編集委員 絵画部・佐々木宗實・山口都 / 彫刻部・藤森民雄 / SD部・中野威

(吉國写真室)